様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　5　月　12　日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：20320024
研究課題名（和文）ポストモダンにおける芸術と写真
研究課題名（英文）Art and Photography in Postmodern Times

研究代表者
山口　和子（YAMAGUCHI　KAZUKO）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号：90093476

研究成果の概要（和文）：

写真の非芸術的側面と従来みなされてきた細部の再現からなる触覚的質が、視覚をモデルとするモダンの美的ヒエラルキーと知を揺るがし、日常的なものや無意味なもの、アブジェクトなものや非焦点性を芸術の世界に組み入れ、芸術のポストモダン的状況を作り出すと共に、アパレイタスとしてのその特性は自我やリアリティーの消失に対応している。他方、芸術と写真とのこの近接は写真の非芸術的な起源への問を再び呼び起こしている。

研究成果の概要（英文）：

The tactile impression of photography which consists in the mechanical representation of details of objects, hitherto considered inartistic, has undermined the modern hierarchy of the aesthetic and intellect which is modeled on seeing.　This photographic sense has created the postmodern situation, bringing everyday things, the meaningless, the abject and the unfocused into the art world, changing the sense of reality and self.　At the same time, the intimate relation of art and photography today calls the inartistic origin of photography into question.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	6,000,000	1,800,000	7,800,000
2009 年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2010 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度			
年度			
総　計	10,500,000	3,150,000	13,650,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史
キーワード：触覚性　アブジェクト　セルフ・ポートレート　アナログ/デジタル　ブラッサイ　カーアン　トゥオンブリ

１．研究開始当初の背景

この２、３０年間に開かれた現代芸術関係の展覧会において、写真、ビデオ作品が、絵画や、オブジェ、インスタレーションを遥かに量的に凌いできた。例えば近年開かれた「ドクメンタ１２」では、有名な料理人がアーティストとして招待され、赤いポピーの花園が作品として制作され、会場は、まるで学生の作品発表会会場のようなさまざまな「悪い趣味」で満たされたカオス的な様相を呈していたが、そのなかで、写真とビデオ・インスタレーションは確実にその勢力を伸ばしていた。

たしかに芸術と写真との結びつきはさほど新しくはない。ダダのフォト・モンタージュ、モホリ・ナギ、マン・レイらの「新しい視」運動やシュルレアリズムにおける写真の使用にも認められる。

しかしこれらの 20、30 年代の芸術における写真の使用と、現代の写真の中心的な位置には決定的な相違がある。20 世紀初頭の新しい芸術運動においては、写真はどこまでも新しい形を発見するための手段であったが、現代における写真はたんなる表現手段ではなく、芸術の世界の中で中心的な位置を占めつつあり、写真の態度と位置は習慣とコードになっているとも、またポストモダンにおける写真の位置（美術館における市民権の完全な獲得）はモダンの規範自身の衰退を意味しているとも指摘されている。

また他方で、写真の芸術としての市民権の獲得は、逆に写真をその非芸術的な源泉から新たに捉えなおそうとする試みをも生んでいる。こうしたポストモダン的現代における写真と芸術との交差とずれのなかで、「美的なもの」の意味や現代におけるアートの可能性を問いつつ、改めて写真の機能や固有性/非固有性について考える必要がある。

なお、本共同研究を始める時点では、写真とポストモダン的な芸術のありように関する、美学、芸術学、ジェンダー論、現代芸術論、写真論を踏まえた総合的な研究は試みられていなかった。

２．研究の目的

ポストモダンとも呼ばれる現代における芸術概念の拡大と多様化は、既成の芸術学・美学や美術史の方法論をも揺るがすがごとき状況を呈している。本共同研究は、こうした混沌とした状況の中で、写真という表現媒体の固有性を改めて問い直しつつ、ポストモダンにおける芸術の変容と多様化の意味、芸術のありようを再考することを全体的な目的としている。研究分担者個々の研究目的は以下に記す。

（１）山口和子：写真が芸術として認められる以前の種々の写真論の考察を通して、写真という媒体の固有性を探りつつ、写真が現代の知覚に与えた影響とともに、ポストモダン的な芸術の特性との接点を考察する。

（２）西村清和：現代のアートシーンにおける絵画と写真との関係を分析しつつ、現代において顕著な形を取るにいたった醜の表現、なかでもアブジェクトな表現の美学的可能性―醜がいかにして「美的」なものとして考えられうるか―を探る。

（３）長野順子：ジェンダー論的な視点から、写真とアートとの関係を考察する事を目的としている。具体的には、２０世紀以降の女性アーティストの多様な活動に共通する「セルフ・ポートレート」写真を比較することを通して、写真使用の変化とその意味を考察する。

（４）川田都樹子：現代のアートシーンの特徴を析出すると共に、トゥオンブリ等の作家を中心として、写真映像と絵画との交互の影響関係を考察する。

（５）前川　修：モダニズム的な写真論とポストモダニズム的な写真論を比較しつつ、芸術/写真、およびデジタル/アナログ写真の対立に代わる写真論の方向性を探ると共に、写真言語の固有性/非固有性の問題を考える。

３．研究の方法

本共同研究は現代のポストモダン的なアートシーンの美的カテゴリーを抽出するとともに、アートと写真との関係、またアートとの関係から認められる写真という媒体の固有性/非固有性の問題を、美学、芸術学、ジェンダー論、現代芸術論、写真理論の多様な視点から理論的かつ実証的に考察する。具体的な方法は以下に示す。

（１）　山口和子：ポストモダンの写真論と知覚論の関係を分析しつつ、ポストモダン的芸術概念の拡大と写真との関係を具体的に考察する。

①モダン的な知のパラダイムとみなされる視覚に対して、写真の特性を触覚性にもとめ、現代の心理学や哲学における触覚論との関係を考察した。考察対象は、ギブソン、メルロ・ポンティー、デリダ、ドゥルーズ、ヴィリリオ、バーギン等。

②芸術のポストモダン的状況は、いわゆる反芸術を芸術の枠組みに組み入れることによって形成されている。現代のアートワールドが、いかにして反芸術的なテーマを写真という媒体を介して芸術へと昇格させて行ったかをブラッサイ、メープルソープを中心に分析しつつ、写真の固有性を探った。

（２） 西村清和：現代における種々の芸術現象および芸術実践の美的意味と可能性を、写真実践にも注目しながら分析する。

①ゲルハルト・リヒターは自らを「最後の画家」と位置づけ、一見、６０年代の抽象絵画の焼きなおしにも見える絵画作品を制作しながらも、種々の写真を作品の素材として使用している。リヒターの作品と言説の分析を行い、リヒターにおける写真の位置づけを考察した。

②現代アーティストによるパフォーマンスや写真実践に顕著に認められる醜、さらにはアブジェクト、ディスターベイショナルなものの美学的背景および美学的可能性を考察した。

（３） 長野順子：２０世紀の女性アーティストの多様な活動に共通する「セルフ・ポートレート」写真の比較を介して、写真の位置づけの変化を探る。

①現代の女性アーティストのパフォーマンスや写真作品に顕著に認められる「アブジェクトなもの」への傾向を美学史的に位置づけると共に、それらのインパクトのジェンダー的な意味を理論的に考察した。

②シュルレアリズム期の特異な存在であったユダヤ系フランス人クロード・カーアンの異性装や演出を用いたセルフ・ポートレート写真およびそれらを用いたフォト・モンタージュと文章テクストとの組み合わせについて分析し、写真とその「自我」像との関係を考察した。

③アメリカの現代アート・シーンにおいてステレオタイプな女性イメージをパロディー化したセルフ・ポートレーで知られるシンディー・シャーマンの写真シリーズのポストモダン的な試みとカーアンのセルフ・ポートレート写真を比較する事を通じて、これらに共通する「自我」像の変容について考察した。

（４） 川田都樹子：現代のアートシーンにおける美的特性を析出するとともに、現代における絵画と写真との関係を分析する。

①シャーカフスキーによる MoMA で開かれた『ミラーズ・アンド・ウィンドーズ—1960 年以後のアメリカ写真の展望』(1978)での「鏡」と「窓」による写真家の分類と、風景画および環境概念における自我の位置づけを比較し、現代における写真と絵画との関係を考察した。

②ポロックとスミッソンの作品を主要に参照しながら、現代における風景画と環境概念および主体の位置づけの変化を跡付けた。

③トゥオンブリの絵画と写真との関係に着目し、彼のモダニズム超克において写真がどのような役割を果たしたかを分析した。

（５） 前川　修：現代、写真/芸術そしてアナログ/デジタルの対立の袋小路に陥っている写真理論を整理し、モダニズムとポストモダニズムを比較しながら、固有性/非固有性の問題も含めて、対立図式を超えうる写真理論の可能性を探る。

①写真に求められる芸術性と芸術性一般との関係を問うとともに、デジタル写真登場以前の写真論と、登場以降の写真論とを比較し、技術至上主義的な観点と批判的な観点等、デジタル写真をめぐる言説を整理することを介して、デジタル写真とアナログ写真が理論に与えた相違、現代芸術への影響を考察した。

②主要にシャーカフスキーの写真論を再考することにより、ポストモダニズムの写真論の限界を考察した。

③アラン・セクーラの理論と作品を、写真の記録性と芸術性との関係を軸に分析した。セクーラの写真論は、その写真実践の難解さゆえにそれほど広く知られていない。しかし、その写真論に目を向ければ、記号論を経由したモダニズム写真論への詳細な批判、写真発明以来の社会的記号としての写真についての諸言説の検討というように、私たちが写真と芸術という問題構成を考えるうえで重要な示唆が含まれている。こうしたセクーラの写真論の生成過程をあらた

めて確認し、さらには写真アーカイヴ論という、静態的で、作品志向的ではない、むしろ動態的で社会と芸術の諸々の摩擦を考慮するための枠組みを検討した。

４．研究成果

ポストモダン的な芸術の傾向に関する研究やポストモダン的な写真の傾向に関する研究や著作は内外ともに少なくない。しかし、写真という媒体の固有性と芸術のポストモダン的な傾向の関係を美学、ジェンダー論、写真論、現代芸術論といった多様な視点から総合的に考察しようとした試みは、少なくとも、日本においては始めてであろう。

また、現代のアートシーンの美的カテゴリーの一つであるアブジェクトの概念の美学的位置づけも新たな試みであり、今後の美学・芸術学の展開に大きな寄与をなしえたと考えられる。

さらに、日本ではほとんど研究されていないクロード・カーアンとアメリカの作家、シンディ・シャーマンとの比較、サイ・トゥオンブリにおける写真の影響等、従来あまり指摘されてこなかった写真実践への考察も行われ、今後さらなる議論を呼びうる指摘がなされた。

写真の固有性/非固有性の問題に関しては更なる議論が必要であるが、そうした写真という媒体の開かれたありようも、芸術との関係から明らかになった。

このように本共同研究は、現代芸術の研究に重要な問題提起をしたのみならず、写真と芸術との関係の考察を通して、Bild そのもの、ひいては芸術と社会との関係にも新たな問いを開いている。本共同研究の成果によって、美学・芸術学の新たな展開が招来されることが期待される。

なお、本共同研究の成果は科研成果報告論文集『ポストモダンにおける芸術と写真』(2011 年 3 月末発行)として出版されている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

［雑誌論文］（計３２件）

①山口和子　「反芸術と写真」、『ポストモダンにおける芸術と写真』(科研成果報告論文集)、査読無、2011 年、４７－５７頁。
②山口和子「芸術の日常化と写真」『岡山大学文学部紀要』第 54 巻、査読無、2011 年、1－10 頁。
③山口和子「今日のアートワールドにおける芸術と非芸術」『文化共生学研究』(岡山大学大学院社文研編)第１０巻、査読無、2011 年、１１９－１３０頁。
④Kazuko Yamaguchi, Das Photographische und die japanische Sinnlichkeit, in: L.Knatz u.a.(Hg.), *Kultrelle Identität und Selbstbild*, München, 2011, S. 207-222.
⑤西村清和　「アブジェクト・アートの美学」、『ポストモダンにおける芸術と写真』(科研成果報告論文集)、査読無、2011 年、３１－３８頁。
⑥西村清和　「プラスチックの木でなにがわるいのか？＜美的＞と＜倫理的＞をめぐって」、『美学芸術学研究』、第２８巻、査読無、２０１０年、１４１－１７７頁。
⑦Kiyokazu Nishimura, On the Aporia of the Pleasure of Tragedy, *Journal of the Fuculty of Letters*, Vol. 34, 査読無、Tokyo Univ.　2010, pp. 23-32.
⑧西村清和　「＜美的なもの＞の分析哲学」、『哲学の探究』、査読無、2010 年、１８－３０頁。
⑨長野順子　「無定形のセルフ・ポートレート―クロード・カーアンの写真実践―」『ポストモダンにおける芸術と写真』(科研成果報告論文集)、2011 年、１９－３０頁。
⑩長野順子　「おぞましさの美学の帰趨―「吐き気」の芸術的表象について―」、『美学芸術学論集』(神戸大学芸術学研究室編)、査読無、2010 年、第６巻、３－２０頁。
⑪長野順子　「＜負＞の共感について―おぞましさの反美学へ」『哲学雑誌』、査読有、第 797 号、2010 年、３６－５８頁。
⑫川田都樹子　「サイ・トゥオンブリの写真―「脱・視覚」画家の視覚装置―」、『ポストモダンにおける芸術と写真』(科研成果報告論文集)、査読無、２０１１年、７－１８頁。
⑬川田都樹子　「ジョセフ・Ｌ・ヘンダーソン『ジャクソン・ポロック―心理学的注釈』」、『心の危機と臨床の知』(甲南大学人間科学研究所編)、査読無、第１１巻、２０１０年、９７－１１７頁。
⑭前川修　「アラン・セクーラのアーカイブ写真論―芸術としての写真、写真としての芸術、社会における写真―」、『ポストモダンにおける芸術と写真』(科研成果報告論文集)、２０１１年、３９－４６頁。
⑮前川修　「シャーカフスキーのもうひとつのモダニズム」、『Photographers' Gallery Press』、査読無、第９号、２０１０年、４－４３頁。
⑯前川修「写真という囮、写真史という囮―杉本博司の写真」、『写真空間』、第４巻、査読無、２０１０年、１０３－１１７頁。

⑰西村清和　「怪異の物語―修羅能と「場所の掟」」、『揺らぎの中の日本文化』（岡山大学出版会）、査読無、２００９年、125-142 頁。

⑱西村清和　「香りと味わいの美学――風景の美学のために」、『美学芸術学研究　27』（東京大学　美学芸術学研究室）、査読無、2009 年、 29-55 頁。
⑲ Kiyokazu Nishimura, The Memory of Place and Ruins, *Journal of the Faculty of Letters*, The University of Tokyo. Aesthetics, vol. 33,　査読無、 2009. 3, pp. 15-26.
⑳西村清和「場所の記憶と廃墟」、『美学』第 234 号、査読有、2009 年、 1-15 頁。
㉑長野順子「カントにおける自然美と芸術美」、『日本カント研究』、査読有、2009 年、９７－１１６頁。
㉒川田都樹子　「アラン・カプロウ再考―死馬を鞭打つことながら」『芸術はどこから来てどこへ行くのか』晃洋書房、査読無、２００９年、４５４－４６９頁。
㉓前川修　「歪んだ鏡としての写真史―ベンヤミン「写真小史」再考」、『美学芸術学論集』第５巻、2009 年、２－２３頁。
㉔前川修　「セクーラの写真論―写真を逆撫ですること」、『写真空間』第３号、2009 年、１０１－１１３頁。
㉕前川修　「物としての写真/写真としての物」、『美術フォーラム２１』２０号、査読無、２００９年、１１６－１２１頁。

㉖長野順子　「「透かし絵」という魔法の鏡―F.シンケルの劇場改革への道」、『美学芸術学論集』第４巻、査読無、２００８年、１－１９頁。
㉗長野順子　「メドゥーサとは誰か―まなざしの神話の転覆に向けて」、『醜と排除の感性論』（科研成果報告書）、２００８年、査読無、１０９－１２７頁。
㉘長野順子　「K.F.シンケルの劇場改革への道」、『シェリング年報』第１６号、２００８年、査読有、８９－１０４頁。
㉙山口和子　「後期シェリングにおける神話と宗教」、『シェリング年報』第１６巻、査読有、２００８年、４８－５２頁。
㉚川田都樹子　「現代美術批評の展開」『アートを学ぼう』ランダムハウス講談社、２００８年、８４－１０５頁
㉛前川修　「デジタルが指し示すもの―デジタル写真試論」、『写真空間』第２号、査読無、2008 年、１５３－１６７頁。
㉜前川修　「写真の語りにくさ―写真論の現在」、『セミオトポス』第５巻、査読有、2008 年、９２－１０９頁。

［学会発表］（計５件）
①川田都樹子「風景（画）の終焉と『風景構成法』―芸術と臨床における「風景」の死と再構築について―」日本シェリング協会第 19 回全国大会（クロス討論会）、2010 年 7 月 4 日、於 神奈川大学
②長野順子「カントと芸術」日本カント協会全国大会共同討議、2008 年 11 月 15 日、於九州大学
③長野順子「芸術は誰がつくるのか」日本美学会全国大会シンポジウム、2008 年 10 月 13 日、於同志社大学
④西村清和「場所の記憶―廃墟の詩学」美学会全国大会、2008 年 10 月 12 日、於同志社大学
⑤山口和子「芸術と写真」日本映像学会全国大会、2008 年 6 月 2 日、於京都精華大学

[図書]（計１件）
①西村清和『イメージの修辞学―ことばと形象の交叉』、三元社、2009 年

６．研究組織

(1)研究代表者
山口　和子（YAMAGUCHI　KAZUKO）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号：90093476
(2)研究分担者
西村　清和（NISHIMURA　KIYOKAZU）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：50108114
長野　順子（NAGANO　JUNKO）
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：20172546
川田　都樹子（KAWATA　TOKIKO）
甲南大学・文学部・教授
研究者番号：00236548
前川　修（MAEKAWA　OSAMU）
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：20300254

(3)連携研究者
なし